

## 日本におけるフィリピン・イメージ考

清水, 展

九州大学比較社会文化研究科国際社会文化専攻・アジア社会講座

<https://doi.org/10.15017/8569>

---

出版情報：比較社会文化. 2, pp.15-26, 1996-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：



# 日本におけるフィリピン・イメージ考

清水 展\*

キーワード：フィリピン，マス・メディア，イメージ，差別，再生産

「革命，クーデター，暗殺，汚職，地震，娼婦……. フィリピンに対して日本人が描くイメージが，いつまでたっても暗いものでしかないのは，嘆かわしいことです。フィリピンは危険な国でも乱れた国でもありません（フィリピン大使館広報担当官ジェシー・P.ヒメネス『週刊現代』1995/2/4, p.65).」

近年，日本とフィリピンの人的交流が急増している。たとえば，1993年度の日本人とフィリピン人との国際結婚は6,452件で，韓国・朝鮮人との結婚（7,380件）について第2位，全体の約25%をしめる。<sup>(1)</sup> また同年末までに日本人の配偶者として外国人登録をしているフィリピン人の総数は32,370人に達する（田中 1995:242）。ホテルなどに隔離された一時的な滞在者としてではなく，わたくしたちの隣人として，普通の生活者として，多くのフィリピン人が今の日本で暮らすようになってきている。にもかかわらず，フィリピン人およびフィリピン社会に対して日本人の大半が抱くイメージは，相変わらず否定的な価値を伴っている。なぜ，そうなのか。<sup>(2)</sup>

本稿では，日本で描かれたフィリピン人/社会像のいくつか代表的な例を取りあげ，それらに共通して見いだされるステレオ・タイプを明らかにしたい。次いで，そうした否定的で好ましくないフィリピン・イメージが繰り返し生み出されてくる背景について考察を加えたい。

## 1 ドラマ「フィリッピーナを愛した男たち」をめぐる論争

1993年12月11日の夜，フジテレビをキー局とする全国ネットの金曜ドラマ・シアターで，「フィリッピーナを愛した男たち」が放映された。「社会派ドラマを得意とすることで知られる（朝日新聞1994/7/4夕刊）」水島総（文中敬称略）の脚本，監督による，CMを含めて2時間ほどの作

品であった。放映直前の番組紹介では，橋爪功がバーのカウンターに座りながら，「大宅壮一ノンフィクション大賞受賞作のドラマ化。妻にも愛想をつかされた，うだつのあがらないサラリーマン，そんな彼がひとりのフィリピン女性を通じて知った様々な現実……」という内容予告をした。

このドラマをここで取りあげる理由は，第1に出稼ぎフィリピン女性（じゃばゆきさん）と国際結婚という，日本-フィリピン関係のきわめて今日的かつ重要なテーマを扱っていること，第2には日本におけるある種のフィリピン人/社会・イメージを端的に表していること，そして第3にテレビという視聴者が多数で影響力の大きい媒体で放映され，その内容をめぐって抗議と反論，批判の応酬，賛否両論の反響をまき起こしたことによる。

この放映に対して，まずリサ・ゴー（NCCJ-日本キリスト教協議会，平和と人権を守る広島センター幹事）を中心とする日本在住のフィリピン女性が，フジテレビに抗議文を送付した（12月28日）。その内容は，「在日フィリピン女性労働者とフィリピンが性差別的，人種差別的ステレオタイプとして描かれたことに強く抗議し……正確で，公正大，非差別的な放映」をするために，「日本社会の中で小さな声しか持たないグループ……の人々に意見を聴く」ことを要求するものであった（メディアと人権を考える会（編）『テレビメディアが問われ私たちが問われている』—以下『テレビ〜』と略す—収録の「在日フィリピン人グループからの問いかけ」：17-19）。

これに対して水島監督（1993）は，1）視聴者からの声や手紙による反応や，朝日，読売，産経など新聞各紙の番組批評が好評であり，2）そもそもドラマは差別的表現などしていない，3）「じゃばゆきさんドラマをステレオタイプになるから差別であり，やめろというのは，多様な描き方や表現の自由に対する挑戦であり，断じて認められない（：113）」と反論した。

\*国際社会文化専攻・アジア社会講座

両者は、2月9日に東京のNCCJ本部で話し合いの場を持ったが、まったく話がかみ合わず、その後にいっそう激しい批判と非難の応酬が続いた。リサ・ゴアの側には、差別問題に取り組む日本人を中心にして「メディアと人権を考える会」が組織されて支援し、一方、水島監督は在日フィリピン人ジャーナリストのグロリア・パイロンや原作者の久田恵らの支持を得た。しかし久田も、逆にその原作がそもそも差別的であり、ドラマは原作にすでに現れている差別性を越えていないとの批判を受けた（稲垣および山田 in 『テレビ〜』）。<sup>(3)</sup>

問題のテレビドラマが、抗議者たちが主張するように「すべてのフィリピン女性と、性産業で働く女性に対する偏見と偽善を日本人の心に植え付け」たり、「フィリピン人全体と国の尊厳を傷つけ、価値を著しく落とす」ものであったのか否か。すなわち、そのドラマがフィリピン人に対する差別や偏見や蔑視を新たに生み出したのか、あるいはそれらを助長し、強化するものであったのか、逆に良いイメージを生み出したのか、それとも何の変化も起こさなかったのかという問題については、すなわち番組の影響や効果を正確に判断するためには、そのドラマを観る前と後とで視聴者のフィリピン・イメージが、いかに、どの程度変わったのか／変わらなかったのかを客観的に調べなければならない。そうした調査によってはじめて、両者のあいだで実のある議論を展開することが可能になるであろう。

性産業で働くフィリピン女性については、むしろ週刊誌やスポーツ新聞などに、興味本意の記事が大量に掲載されている。偏見と差別の助長や再生産のメカニズムを明らかにするためには、テレビはもちろん、新聞や雑誌を含むマスメディアの役割を詳細に考察する必要がある。しかし、それは現在の私の力量を大きく越える。

ここで考察したいのは、ドラマの効果・影響の有無や程度ではなく、抗議者の主張するもうひとつの論点である、「性差別的、人種差別的ステレオタイプとして（フィリピン人が）描かれた」か否かという問題である。監督はそうでない」と主張する。さらには自らを「表現者」と規定して、表現の自由を絶対の価値とすることで、逆に抗議行動を「ソフトファシズムの表現狩」と糾弾する。しかし残念ながら、私自身がビデオで繰り返し観たかぎりでは、監督の作品には、自由で主体的な表現者に求められる、見慣れた風景を異化し、新たな発見をもたらす、世界を違った風に見直すように誘う力を欠いている。むしろ、世間で流布しているある種のフィリピン・イメージに重ね合わせてルビーとフィリピンを描いている。

おそらく監督個人が差別主義者であったり、差別的な表現を意図的に用いているわけではない。むしろ日本で歴史的に蓄積強化されてきた、特定のフィリピン人・社会イ

メージが、自由で固有の視点を持つと信じて疑わない監督自身のまなざしのなかに、そのまま現れてしまっていると私は考える。抗議者の側が訴えようとして明確に表現されなかった問題点は、監督ひとりの個人的な責任であるというよりも、本人にも自覚されないほどに根深い、日本人からフィリピン人への偏見と差別に満ちた眼差し、イメージ付与であったと思う。

まず、ドラマのストーリーをどう読むか。監督は「ただ作品があり、その内容があるのだ。問題にすべきは、その作品の内容がどうであるかという事だけだ（1994:176）」として、「ドラマ全体の流れを見ないで、一部のセリフやシーンを取り上げ、ここが差別的だ、ステレオタイプだなどと言われても納得出来ない。『しっかり、ちゃんと、このドラマみろよ……よく考えろよ……それから文句つけろよ』（ibid.:168,171）」と主張する。<sup>(4)</sup>そして、「私のドラマは、欠点だらけのステレオタイプの関係の日比の男女が、様々な事件や葛藤を通して、悪戦苦闘し、民族や国境を越えた愛を実現していく姿を描いた作品であり、ある意味でファンタジックなラブストーリーである（ibid.:168）」とその内容について解説している。

一方「メディアと人権を考える会」世話人の吉田和子は、「ルビーは『かわいそうな』女を演じることのできる女。家族のためなら詐欺まがいの嘘をつき、男をだましてお金を巻き上げる。恋人にも、多くの嘘と隠し事をする女として描かれている。敏夫は当初、知性の片鱗さえない軽薄な男として登場し、後には人格が一変するほどのまっとうさを持つようになる。ルビーとは対照的に、正直な人であり、何度ウソをつかれても許し続ける男として描かれている。彼を変えたのは愛であり、たとえだまされてもルビーにかけ、信じようとするひたむきさ、純情に生きる男として描いている（『テレビ〜』:12）」と読み解く。さらにもう一人の世話人の稲垣紀代は、「放映されたドラマが日本人に伝えるメッセージは、主演の玉置氏の発言がしみじみも言い当てている。『挫折を感じている人への応援歌になるだろう』というのだ。だから『フィリピンは貧しい国だが（と優越感に訴え）セックスと優しさを与えてくれる女性との幸せがつかめるかもしれない。君も頑張れ』と、多くの日本人男性に語りかけているとも言える（ibid.:81）」と主張する。

この論争を調停しようとして自分の編集する雑誌『創』（1993/10）に特集を組んだ篠田博之は、「つまり、敏夫は、経済的には豊かだが精神的には貧しい日本という国を捨て、経済的には貧しいけれど、日本社会が失ってしまったものをもっているフィリピン社会に移り住み、そこで愛情と家族を手に入れる。水島さんの『貧しいけれど素敵な』フィリピン社会への、ある種のロマンを敏夫が体現してい

くというドラマである（:38-39）」と説明する。

私自身は、表面的には、いい加減な日本男性が、フィリピン女性を愛することによって成熟し変身する物語であり、その底流に、男の一貫して誠実で一途な愛が、嘘つきのフィリピン女性を改心、更正させ、さらには日本軍に母親を殺されて日本人を憎んでいる両親の心をも溶かして結婚の許しを得るといふ、<sup>5)</sup>日本人の側の一方的な誠意と善意の物語が綴られていると理解した。

## 2 通俗的なフィリピン女性像

この作品の底流に流れる、嘘つきのフィリピン人と誠実な日本人という物語は、そもそも、フィリピーナを愛してしまったがゆえに翻弄される日本の男たちを描いた久田の原作の各所で繰り返されている。たとえば、アグネスを空港まで見送りに来たふたりの男が、中絶費用の名目で別々に計60万円をだまし取られるエピソードや、結婚前夜に相手のテッシーが実は28才ではなく40才であることを打ち明けられ、新婚旅行から帰ったら24才と16才の2人の娘がいたことを知らされて男が仰天するエピソード、あるいはエルミタでカラオケバーを開いたら始終警官に賄賂をせびり取られたうえに、信用して名義を借りたフィリピン人に店の権利をすべて取りあげられるエピソードなど、ドラマのなかで描かれたフィリピン人は、水島監督の空想による捏造ではなく、久田の実際の取材にもとづく実在の人物（仮名）である。<sup>6)</sup>

さらに注意して見直せば、嘘つきと誠実という対比は、フィリピン人と日本人の係わりを描く様々な作品のなかに容易に見いだすことができる。たとえば、同じフジテレビのドラマ『愛という名のもとに』（1992）のなかでは、出稼ぎフィリピン女性が登場して、日本人の純朴な青年を詐欺同様にだまし、会社の金を使い込んだ青年が自殺するというエピソードが語られている。

『モーニングKC』に連載中の弘兼憲史の人気漫画「課長・島耕作」でも、主人公の1年ほどのフィリピン左遷<sup>7)</sup>・マニラ駐在時代の生活と出来事が描かれている（1990-91）。まず主人公の島がマニラに赴任する直前、大学時代からの友人の五十嵐（元全共闘情報部長）に呼び出され、フィリピン・パプのダンサーであるステラを紹介される。五十嵐は彼女を深く愛しており、結婚するつもりであることを打ち明ける。フィリピンに戻ったステラに五十嵐は毎月5万円の送金を続ける。マニラに赴任した島は、ステラがマンションの隣室の日本人駐在員松原の現地妻として、セックスのためだけに時々通ってくるのを見かけて驚愕する。その後、五十嵐からの国際電話で頼まれて、島がトンドにある彼女の住居を訪ねてみると、そこには夫と2人の子供が

いる。島が詳しい事情を聞くために彼女と家の外にでると、そこはスモーキー・マウンテン。ゴミ拾いをする子供たちを見ながらの立ち話で、ステラは、五十嵐を大好きだがカトリックなので夫が生きているかぎり離婚できないこと。あと1年で家が建つから、それまで黙って見のがしてくれるようにと懇願する。そしてフィリピン人は貧しく日本人は金持ちであるから、「持っている人が持っていない人に与えるのは当然の義務よ！違う？」と反論するステラに、島は言葉を返すことができず、どうすればよいのかと自問する。

ここで描かれたステラの姿は、34才の年齢を24才と偽り、同じくスモーキー・マウンテンの自宅に4人の子供のいることを隠し続け、売春はビジネスであり母の腎臓透析の費用の金が必要だと泣いて敏夫に訴えるルビーの姿とぴったりと重なる。その両者が伝えるイメージは、ドラマのなかでフィリピンに帰国したルビーを追いかけるため、敏夫が彼女の働いていたクラブに出かけてマネジャーに住所を尋ねたときに、その男が言った言葉が端的に示している。「かわいい顔してるけど、けっこうしたたかだよ。ひどい貧乏だから生きるためなら何だってやるよ。純情な日本の男なんてイチコロよ。」

たしかにルビーやステラは、単にドラマや漫画のなかだけに住んでいる幻影ではなく、実際にどこにでもいる現実のフィリピーナのひとりであるかもしれない。原作者の久田に頼まれて、水島監督の応援をしたグロリア・バイロンは言う。「ありのままの事実を知ると辛くなるが、それは水商売のフィリピン人女性の多くは、実際には、純真無垢で男に食物にされる田舎娘なんかではなく、策略家であり、二面性を持つ売春婦であるということである。彼女らは、法を破るということになんのためらいも感じてはいない（1993:40）。」

浜なつ子の『マニラ娼婦物語』（1988）もバイロンと共通する視点を有する。同書は、歓楽街マピニ通りにあるビアハウス（売春ハウス）「ゴーゴー・ロメオ」での娼婦ブリジットとの出会いから、彼女がじゃばゆきさんとして日本に来て自分のアパートで一緒に暮らし、さらには彼女の故郷の村を二度訪ねるまでの経緯を、浜自身の体験に即して描いたノンフィクションである。主人公のブリジットは二人の娘を故郷の両親に預け、そのことを隠して日本で結婚相手を必死に探している。「結婚すれば、日本国籍がとれるから、どこであろうと自由に働ける」からだ。それにひっかかったのが大学生の大野君で、「童貞を奪われてしまった大野賢一くんは、このときから女に騙されるプロセスへと突入していったのだった（:126）。……ああ、彼には自分がカモにされているという認識がまったく欠けているのである。大野君は、勤勉と誠実さこそ人間のあるべき姿

だ、と教えられた社会の産物である。一方、ブリジットは、嘘や賄賂や狡猾さによって、生きる知恵とせざるを得ない社会の産物であった(:139)」と解説する。<sup>68</sup>

浜のノンフィクションが、多分に興味本意の際物的な取扱いであるとしたら、いわゆる純文学の立松和平の作品『雷神鳥サンダーバード』(1993)でも同様なフィリピン女性が描かれている。主人公は40頭の牛を飼う純朴な若者の清水哲也。ある日、彼は見ず知らずの結婚斡旋業者から突然の訪問を受け、不法滞在のフィリピン女性ダイアナのビザ取得のために100万円の謝礼で戸籍を売るという偽装結婚をもちかけられ、了承する。そしてダイアナの働くフィリピン・クラブで初対面したとき、「天使が飛んできたんだよ」と一目惚れしてしまう。以後は「お前には俺のもっているものは全部やるよ。牛が欲しいのなら、40頭全部持っていってくれよ。俺の命が欲しいというなら、いますぐにでもくれてやるさ(:224)」と一途に想い入れる。一緒に暮らし始めたダイアナは、哲也の一途な気持ちと態度にほだされて、「テツヤさん、いい人ですねー。私、悪い人ですよー。悪いこと、たくさんしてますよー。たくさんたくさん嘘つきました(:233)」と涙ながらに心情を吐露する。それに対して哲也は「本当に悪い人間なんかいるか。俺をハッピーにしてくれて、それで悪い人間か(:235)」とダイアナをかばう。

しかしつかの間の同居生活の後、ダイアナは失踪する。そして、クラブの同僚のフィリピン人から、彼女がフィリピンで結婚しており、子供もいることを知らされる。しかし哲也は、「俺は百万円で籍を売ったんだよ。だから何をされたってしょうがねえんだ」と友達に語る。「純情だな」と言われて「馬鹿みたいだんべ。わかってんさ」と答え、あくまでダイアナをかばい、どうしてもまた一緒に暮らしたいと願ひ続ける。そして、あきらめきれずに新宿の歌舞伎町に出かけて尋ね歩き、覗き部屋式ストリップ場で出演中のところを発見する。「やっとな探したよ」とだけ言えた哲也に、ダイアナは「テツヤさん、いい人ですねー。私、悪い人。たくさんたくさん嘘ついてますねー。テツヤさんと暮らすこと、苦しいですよー。嘘一杯。もっともっと嘘増えますね。私、ダイアナじゃない。私は誰だかわからないよー。悲しいですねー(:372)」と涙を流しながら頭を下げる。「君がだれだっていいさ。一緒に帰るべ」とうながす哲也に「お願いだからこないで。悲しいようー」と叫びながら、「再びダイアナは闇の中に吸い込まれて消えてしまった(:373)」という文章で小説は終わる。

主人公が哲也であり、ダイアナによってかき立てられる恋情と情熱、彼女の突然の失踪がもたらす喪失の悲痛と空虚、それらの激しい感情の起伏がもたらす平板な日常世界の一変が小説のテーマであるために、ダイアナ自身の内面

の描写は不十分である。哲也にとってダイアナは突然に舞い降りた天使であり、向こうから飛び込んできた鳥である。そして小説が日本人の哲也を主人公とし、その心情を深く理解可能とするような描写を続けることにより、結果として「青年の悲しみ、現代の軋み」という主旋律の通奏低音として、カタコトの日本語以外は鳥語(フィリピン語)しか話さず、言葉も行動も理解不能の存在、あるいは嘘を重ね、誠意の通じない絶対的な他者としてダイアナを位置づけてしまう結果となっている。<sup>69</sup>しかも日本人の恋人＝夫の前から突如消えたのち、実は結婚し、子供もいることが分かるというパターンは、先のルビーやステラやブリジットと同一である。

以上に見たように、テレビ、漫画、ノンフィクション、小説に描かれたフィリピン人は、いずれも若い「じゃばゆきさん」(女性)であり、彼女らにはきわめて似通った一定のイメージが付与されている。「じゃばゆきさん」を取りあげることに自体に問題はない。むしろフィリピンから日本への入国者の過半が20代の女性であるという事実を考えれば、彼女らがそうした作品の主題となることに不思議はない。問題は、その描かれ方である。確かに、恋人に捨てられたり結婚に失敗したりして、子どもをかかえて生きてゆくために、日本で売春をせざるを得ない女性も実際にいるだろう。しかしそれは、フィリピン人だからというよりも、貧しさと雇用機会の少なさのゆえであり、日本人でも同様な立場に置かれた場合には余儀なくされる選択となりうる。実際、かつて戦前までは、日本人女性でもからゆきさんとして、フィリピンをはじめとする東南アジア地域への出稼ぎを余儀なくされる者が多数いた。

もちろん、現在興業ビザで来日するフィリピン人女性(エンターテイナー)の全員や大半が売春をするわけではなく、また日本人の男を騙して手玉にとる者ばかりということもない。むしろ、労働条件や賃金などに関する契約の不履行で彼女たちが騙され被害者となる場合が少なくない。また日本人男性との恋愛で心痛めているフィリピン女性が確かに多いが、ほとんどの場合、日本人男性のいいかげんさが原因である(鷹沢:109)。しかし、社会運動として取りあげられる場合(たとえば父親が認知または扶養しない混血児の問題)を除けば、一般の人々を対象としたメディアには騙されたフィリピン人を主人公とする作品がほとんど登場しない。騙す側はいつもフィリピン女性。主人公の日本人に悪人はおらず、日本人の悪が主題として描かれることはない。

以上に内容を紹介した作品で描かれたフィリピン女性は、一定のステレオタイプを割り当てられ、そのことによって逆に主人公である相手の日本人の側面にそれと対照的で善きイメージを付与し続ける。その対比の構図は、「外

見や外面を上手に繕い、魅力的に振る舞い、男を引きつけ騙す」フィリピン女性に対して「内面の真面目と誠実さゆえに、翻弄され貢ぐ」日本男性というものであり、対照表をつくれれば以下ようになる。

フィリピーナ	日本の男
明るく陽気な 社交的で愛想の良い 嘘つき 金目当て 自由奔放	うだつのあがらぬ 内向的で不器用 誠実 愛一筋 翻弄される善意

### 3 繰り返されるステレオ・タイプ・イメージ

上記のようなフィリピン女性のイメージと結びつき、まさにそうした人間を必然的に生み出すようなマイナス価値を伴うフィリピン人・社会像が、日本人の研究者によっても描かれている。日本に入国するフィリピン人の過半が若い女性であり、国際結婚の99%以上が日本男性とフィリピン女性の組み合わせである以上、現在のフィリピンのイメージがフィリピン女性のイメージと重なり合うことは不思議でないかもしれない。

しかし、男としての日本と女としてのフィリピンという性差的なイメージは、その背後にある日本とフィリピンの政治経済的な力関係の隠喩として機能している。戦争期にはアジアの盟主として指導する日本、戦後には賠償を終えた後にも総額で1兆円を越える政府開発援助を与え続けている日本と、指導され援助されている（しかしアメリカナイズされて誠意が通せず、信用できない）フィリピンという政治経済的な優劣の関係が、男と女の差別的な関係のイメージとまさに重なり合うために、上記のようなフィリピン女性像が繰り返し流布され、抵抗なく受け入れられてゆくのである。

たとえば、人類学者の菊地靖は、『文化人類学』（1991）という教科書の第2章「親族の関係と互酬」の第1節を分担執筆し、親族構造と行動様式を説明する項目で以下のように論じている。「日本的な単系制社会を『高度に信頼しあえる社会』（highly trust society）と呼ぶことができる（:53）」に対して、「フィリピンのような双系制社会では、儀礼的な契約関係なくして非血縁関係にある人々に対しては、すべてが猜疑の対象である。……このような社会を『不信の社会』（distrust society）と呼ぶことができる。ここで両者の比較をまとめてみると、フィリピンにみられる双系制社会における人間関係の基盤は、ほとんど『個人対個人』の関係に基づく『損得関係の原理』によって支えられている（:54）。」<sup>(40)</sup> 不信の社会に生きる嘘つきのフィリピン

人と、信頼の社会に生きる誠実な日本人という差別的な構図そのものである。

フィリピン人の行動様式を律する価値に関して日本語で書かれた文献としては、政治学者としてフィリピンの行政制度の研究を十数年にわたって続けてきた中川剛の『不思議のフィリピン：非近代社会の心理と行動』が、もっとも網羅的である。それは純粋な学術研究書というよりも、一般読者向けの解説書という性格を有し、マニラに赴任する駐在員とその家族の必読書と言われている。

氏は、まず「はじめに」の冒頭の第3行目から、自身のフィリピン体験と印象が良くないことを率直に述べる。「依然として感じは良くない。私だけが格別に vulnerability(攻撃誘発性)が大きいのか。ほとんど毎回のように騙される。必ずなにかの病気にかかる。時には、これで終わりかと思うような危険にさらされる。要するにろくなことはない（:8）。」しかし、滞在を重ねるごとに気分はくつろぎ、庶民の素顔が見えるようになると、「フィリピンは私を引きつける。庶民の生活は苦しいが、かれらの日常は明るく楽天的である（:10）。」危険で、貧しく、人を騙すが、明るく、楽天的なフィリピンというイメージが、以後も繰り返し語られてゆく。

まず、第1章では、「恩」と「恥」という章題のもと、その二つの価値がフィリピン人の心性のいわば核心であるという評価を与える。しかし、その内実が日本とどう異なるのかを説明する段になると、結局は、統一国家を持ったか否かという、両者の歴史的相違に帰結させるだけである。そして「フィリピン人は、恩に関して負債者である者に、大きな緊張を課すことはない。……借方のほうは負債をさほど重圧とは感じない。……それにしてもわれわれの恩や恥に、重く、時には暗いものがつきまとうのに対して、フィリピン人のそれらが乾いているのはなぜだろうか（:28）」と問いかける。「恩」を重圧とは感じず、日本と異なって乾いたものであるならば、それがフィリピン人の行動を律し、社会生活を規制するような強い価値とはなりえない。

にもかかわらず、それを核心的な価値として重要視しているのはなぜか。論理的に考えれば、実は核心的ではないのに誤認しているか、あるいは、核心的ではあるがそれさえもフィリピン人の行動を強く律しないほどにフィリピン人の内面は軽く道義性に欠けるか、のいずれかである。後にふれるように、植民地社会科学を批判し「解放の心理学」を構想するエンリケスは前者の立場である。

中川の解釈は後者である。そもそもスペインに植民化される以前に統一国家や王朝を持たなかったゆえに、国家意識が希薄で公共性の観念が不在である。だから政治関係（すなわち公）と社会関係（すなわち私）との二者択一の板挟みの生じる余地がなく、恩にこたえる際に義理人情がから

むこともなく、さばさばしているというのである。そしてフィリピンでは「人間関係がすべて」であり、パキキサマ(pakikisama)が重要な行動様式になっていると指摘している。パキキサマとは相手に合わせて協力、協調、あるいは同調してゆく態度をさす。パキキサマを重視するゆえに、「まず相手を喜ばせなくてはならないから、フィリピン人はたいてい人前で話すのが巧みである。しかも熱をこめて粹な喋り方をする。もっとも、中味の方は保証のかぎりではない。日本人からみれば内容空疎と思われるようなことを、じつに堂々と長々と喋っているのに驚かされることがある(:52)」となる。

中川の論述を取りあげたのは、先にも述べたように、それがフィリピン社会を律する価値とそれに基づくフィリピン人の行動様式について一応正面から取り組もうとしていることの他に二つの理由がある。ひとつは、それが、戦時体制下の日本人のフィリピン観と基本的な差異がないこと、すなわち戦後のフィリピン研究の蓄積が日本人のフィリピン理解をほとんど深めなかったことを示すためである。もうひとつは、それが中川の言うように、「いくつかの言葉を鍵として他国民を理解する試みの先駆け」どころか、1960年代のリンチに代表されるようなアメリカ社会学者のフィリピン理解の延長線上あるいは無批判な受容に過ぎないことを示すためである。しかも、それらの研究はフィリピン人研究者から強い批判を繰り返されてきたにもかかわらず、その影響が現在に至るまで続いており、あい変わらず社会科学の装いによるフィリピン誤解を一層強化しているのである。

#### — 戦中のフィリピン社会論 —

中川の論調が、一応の建前として、フィリピン的なものを日本人が失った良きものと同根であるとして評価をしようとしているのに対して、戦前、戦中の日本人研究者、ジャーナリストによるフィリピン人論は、その偏見、蔑視、差別意識を何のためらいもなく書きとめている。たとえば英文学者の中屋健一(健一)は、『フィリピン』と題された著書の中で、「フィリピン人の性格」という章をもうけ、その冒頭で、次のように述べている。「フィリピン人の性格を一言にして評せば東洋人にして東洋人でないということにつくる。あらゆる東洋的な道徳が西洋人たるスペイン人とアメリカ人によって冒瀆され、東洋民族としての光輝ある自覚に達しないフィリピン人を癱痺せしめているのである(:35).」続いて「見栄坊なフィリピン人」「嘘つきが天性」「読書せぬ文化人」「働くことの厭な使用人氣質」「洋服を着た野蛮人」という5つの節を立て、その内容を詳しく説明している。

さらには日本の南方支配の基礎資料として、日本人研究者の総力を結集して編まれた『南方年鑑』(1943)のなか

で、フィリピン人の特性に関しては次のような説明がなされている。同書は、「南方諸民族の文化の本質を把握し、大東亜の民族共栄の基礎をなすために」編集、出版された大部の学術書であった。「フィリッピン人の一般的特性として挙げられることは(1)臆病にして優柔不断、実行力に乏しい、(2)口舌は頗る巧みで、虚言を平気で吐く、(3)怠惰にして労働を蔑視、勝負事に熱中し、虚栄心が非常に強い、(4)小手先の仕事と模倣が巧みであり、音楽と語学の才に富んでいる、(5)女尊男卑の風が著しい、(6)計数の念に乏しい等等、いかにも被征服民族らしい短所が多く、大国民たるの素質を有するものとは見なし難い(有村恭:1047-1048)」とされてきた。

まったく同様なフィリピン人観が、平塚・班目の共著による『詳解・比島事情』のなかの記述にも見いだされる(1942:35-38)。ただし、平塚・班目は、「怠惰、虚偽、虚栄、社交性あるいは自主、独立の精神の欠如」などといったフィリピン人の短所については、「一面では被征服国民の通有性であり、恵まれざる彼らをとる保護色である。又不信、盗癖などは哀れなる彼らをとる消極的な反抗でもあるのだ」と述べ、弱者の抵抗という側面に一定の評価も与えている。そして「フィリピン人の民族性には何の長所としてとりあぐる点がない」としながらも、それは植民地支配のもたらしたものであると説明し、なかば憐みをもって同情的な理解も示すのである。

以上にみたような戦中期のフィリピン人論・社会論の基本的な論点は、中川の解説するところと相同である。違う点があるとすれば、前者が日比両国の相違を露骨な優劣関係のなかで捉えるのに対して、後者はそれをオブラートに包んでいることである。たとえば前者が「臆病にして優柔不断、実行力に乏しい」と表現するところを、中川は「大多数の普通のフィリピン人は、おとなしくて控え目である。……政府に対する不満があっても生活が苦しくなっても、直接行動によって抗議するものは少数である。大多数の庶民は、まさに物言わぬ大衆である(:215-216)」と述べる。「口舌は頗る巧みで、虚言を平気で吐く」は、「フィリピン人は生まれつきのストーリー・テラーで……いかにも能弁であたりが良くて、人怖じしない、……欧米人も中国人も韓国人も日本人も、正直であることを重要な徳のうちに数えているが、フィリピン人の場合は、それ自体は大きな意味を持たないようである。……正直の方はフィリピン人の価値観の中に置かれることがない(:45)」となる。

「虚栄心が非常に強い」は、「金がないのに気前よく見せようとするフィリピン・ホスピタリティー(:178)」と言い換えられる。「怠惰にして労働を軽視し、勝負事に熱中する」は、フィリピン人はたとえ資産があっても中国人のように「黙々と働き、営々と蓄財するにはやはり不向きによ

うであり、国民総一発屋(:150)」と婉曲に表現される。「女尊男卑の風が著しい」は「母性型社会：アンダー・ザ・サヤ」という表現のもとで1章をさいて説明される(:112-125)。

さらにまた、中川の解説で戦中期のフィリピン紹介と異なるもう一点は、それが、フィリピン語をキー・タームとして取り上げ、その説明を中心にして論述を進めている点である。既に触れた「恩(ウタン・ナ・ロオブ)」、「恥(ヒヤ)」、「パキキサマ」をはじめ、「バハラナ(人事は尽くした、後は運次第)」、「バヤニハン(助け合い)」、「ニンガス・クゴン(熱しやすく冷めやすい)」、「カンニヤ・カンニヤ(自分自分)」、「アワ(慈悲)」、「デリカデサ(たしなみ)」などが各章の副題として紹介されている。

そのなかでも、実際にフィリピン社会を律する価値として重要視されているのは、「ウタン・ナ・ロオブ」、「ヒヤ」、「パキキサマ」である。かつて、菊地(1980、初出は1977)も平均的フィリピン人の価値観として「パキキサマ」、「ガラン(尊敬)」、「デリカデサ」、「ヒヤ」、「ウタン・ナ・ロオブ」の5つを挙げ、さらに古くは高橋(1972)が、「ヒヤ」、「アモール・プルピオ(名誉)」、「パキキサマ」、「ウタン・ナ・ロオブ」の4つをバリオの価値観として挙げている。菊地も高橋も、当時すでにフィリピンにおいて1年以上のフィールド・ワークを行っているのだが、彼らの指摘する価値は、彼ら自身の調査資料からの析出というよりも、1960年代に大きな影響力を有したリンチを中心とするアテネオ・グループの枠組みをほぼそのままに踏襲しつつ、フィールド体験にもとづくエピソードを付け加えただけであるとの印象を否認ない。

#### 4 リンチの「円滑な人間関係」説とその批判

フィリピン社会を律する価値およびフィリピン人の行動様式に関する研究の方向を規定し、議論の土俵を設定したのがアテネオ・デ・マニラ大学のアメリカ人神父のフランク・リンチ博士を中心とする社会学、心理学、人類学者たちであった。とりわけリンチの論文“Social Acceptance Reconsidered”(1964, 1973)が決定的な影響力を持った。

同論文の内容は、日本でも多数の研究者によって紹介や言及がなされているので、ここで詳細な説明を繰り返すことは避けたい。要約すれば、フィリピン人の目的となっているのは社会的受容、経済的保障、社会的上昇の3つであり、とりわけ社会的受容が重要である。社会的受容とは「かくある自分を、あるいはかくあると信じている自分を、そのまま仲間達から受け入れてもらい、さらには自分の地位にふさわしい扱いを受けること(:17)」と定義される。そして社会的受容を達成するために、1)人間関係の円滑さと、2)個人的な侮辱に対する敏感さ、が媒介的な価値と

して重要とされる。

とりわけ強調されている「人間関係の円滑さ」とは、「むつつりや気むずかしい表情、きつい言葉、明白な不本意、暴力などといった葛藤を示すサインを押さえ込んで、他人とうまく折れ合ってゆく手際の良さ(:10)」と定義され、円滑さを実現するためには、1)パキキサマという行動様式、2)婉曲表現の多用、3)仲介者の活用、という3つの方法があると指摘している。また「個人的な侮辱に対する敏感さ」の具体的な現れとして1)ヒヤと2)アモール・プロピオという観念があって、フィリピン人の行動様式を規定しているという。

リンチの論文全体については、ランダ・ホカノが、その方法は厳密さをまったく欠き、不十分でバラバラの資料からおおざっぱな一般化を行っているだけであると批判し、さらには彼(ホカノ)自身が調査したパナイ島やマニラのスラムの事例からはリンチの説と正反対の結論が導かれると主張する(1966a:281-286)。それに、そもそも「社会的受容」はアメリカ合衆国においても極めて重要な価値観となっており、それが現れる社会関係の種類や場が異なるだけであるから、フィリピンでのみ「円滑な人間関係」を強調するのは的外れであるとする。「円滑な人間関係」という媒介的な価値についても、セクレスト(1969)は、人間関係の幾つかの側面においては他のどこよりも、フィリピンではストレスが強いと信ずるに足る十分な理由があると言ひ、人間関係の円滑さはむしろそれが困難であるから強調されるのであって、その実現のためにはたえず注意深い気配りがなされていると主張している(:312)。

さらには、リンチを多分に意識しながら、英語を使ってなされてきたフィリピン社会に関する社会科学による研究の総体に対して、心理学者のヴィルヘリオ・エンリケスが最も痛烈な批判を続けている。それはフィリピン人の行動様式についてのアメリカ人の語り方、あるいは決めつけ方に対する、フィリピン人の側からの異議申し立てに他ならない。すなわち、「円滑な人間関係」説や、「パキキサマ」の強調によって矮小化されてしまっているフィリピン人像・フィリピン社会像を新たな視点から再構築しようとする試みである。また、それは民族の矜持や尊厳を伴うものとして文化の自画像を描こうとする模索の出発点としての、フィリピンニズム(オリエンタリズム)批判であると言ふこともできる。エンリケスによれば、

フィリピン社会科学は、英語で書かれ発展してきたのであるが、その植民地的な特質が、残念なことに、フィリピンの「民族的性格」や価値をめぐる研究に際だって顕著に見てとれる。これらの研究のほとんどは、借用した言語、分析に用いられる不適切なカテゴリー、現地の言語や文化の目的的使用といったものに、ま

ったく無批判に依拠している。

固有の価値や行動様式とされるものには、英語（フィリピン・タイム）、スペイン語（デリカデサ、アモール・プロピオ）、そしてスペイン語と英語のおかしな混淆（マニャーナ・ハビット）などを含んでいる。もし仮にフィリピンの用語が取り上げられていたとしても、それらは単なるラベルとして機能しているだけで、しばしば、ほとんど調査もせず、その内容や重要性もなら理解していないのである。さらには、アメリカ志向の英語調査者が見つけた現地語は、基本的には中部ルソンのタガログ語（e.g. バハラナ、ニンガス・クゴン）から取ってくるのである。……

社会科学の調査において現地語のしかるべき役割を否定し続け、それを便利なラベルのための単なる情報源や、見かけばかりのフィリピン化と尊厳のあかしに矮小化してしまうことは、せいぜいのところ、フィリピンの価値とみなすものにつけられた、てんでばらばらな現地語集成といったものになるだけである。このようにして、今や、フィリピンの価値のリストは、フィリピン人のパーソナリティーを、アモール・プロピオやバハラナやパキキサマなどのエキゾチックな用語を読むことでよりよく理解したと感じてしまうような、研究者と観光客の双方にとって、手軽に利用できるものとなっているのである（1992:58-59）。

さらにエンリケスは、「ヒヤ、ウータン・ナ・ロオブ、パキキサマの三角形」が外面に表れる価値の総体を形作っていると見なすのは、植民地社会科学によって助長された誤解であり、それらは、いわゆる「順応的な価値」としてくくるべき一つのカテゴリーを構成しているに過ぎないと言う。そして、それと対照的な対となって、「対決的な価値」と呼ぶべきカテゴリーを構成する価値として「バハラ・ナ（決意）、サマ／ラカス・ナン・ロオブ（憤慨／ガッツ）、パキキバカ（抵抗）」の3つがあるという。それゆえ前者の「順応的な価値」のみを実際以上に強調し、他を軽視あるいは無視してきたアメリカ志向の研究者は、結局は卑屈でこびへつらうだけの、良く言えば陽気で社交的でホスピタリーいっぱいフィリピン人というイメージを作り上げるのに手を貸してきたと糾弾する（ibid:64-65）。さらにウータン・ナ・ロオブをホルンスイナーのように互酬性の枠組みの中でのみ捉えることは、恩恵を施す者として植民者をイメージ・アップする欺瞞に加担してきたと非難するのである（ibid:67）。

以上に紹介したエンリケスの批判は、日本人の研究者にも当てはまる。フィリピン社会の価値とフィリピン人の行動様式に関して、今まで日本人研究者が行ってきた解説や分析は、戦中期にジャーナリストや文学者たちが書いた

印象論としてのフィリピン人論を超えたり一変したりするものではなかった。もし変わった点があるとすれば、1960年代のアテネオ・デ・マニラ大学を中心とするアメリカ志向の社会学者達の研究を受容し、利用し、幾つかのフィリピン語をキー・ワードとして取りあげて説明するという、新たなスタイルを発見したことぐらいである。

すでに詳しく見た中川をここで再度取り上げることは控えるが、たとえば、30年近くのフィリピン研究の経験を有する人類学者の次のような論述も、まさにエンリケスが糾弾してやまぬものである。菊地（1990）は、「フィリピン人としての価値に従った行動様式を規定する幾つかの言葉」あるいは「フィリピン民俗社会の人間関係をスムーズにするためにパターン化された社会行動様式、……その行動・行為を誘発する言葉」として、パキキサマ、ガラン、デリカデーサ、ウータンナ・ロオブ、ヒヤの5つを取り上げて説明した後、次のように断定している。

フィリピン社会のこれまでのべてきたような集団結合原理から見ると、抽象的なイデオロギーを掲げた集団を結合してゆくのは至難の業である。すなわち、フィリピンの伝統的民俗社会の底流に見られる、弱者は強者あるいは富める者から庇護を受けるのは当然であるという民俗レベルの価値観は、マルクス主義的階級闘争や連帯思想とは真っ向から対立するものである。従って連帯感や集団形成志向を誘発させるためには、「損得関係」による利益集団主義的集団にならざるを得ないのである（:176）。

しかしながら、自己の私的利益に関する損得計算を優先し、マルクス主義的階級闘争や連帯思想とは真っ向から対立する民俗レベルの価値観を強調するこうしたフィリピン理解では、1970年代以降のフィリピン共産党の躍進を説明することが出来ない。1980年代の半ばには2万数千人の武装ゲリラ（新人民軍）を有し、マルコス政府軍に対して戦略的均衡状態にまで勢力を拡大し、全国のほとんどの州で活発な活動を展開した共産党を支えたのは、パキキサマやウータン・ナ・ロオブなどといった体制に「順応的な価値」でなかったことは言うまでもない。またマルコス政権を打倒した「二月革命」に結集したマニラの中産階級の市民が、無言でいつづけることの損得計算の結果として、反マルコス運動を展開したわけではなかった。<sup>(11)</sup>

さらには、第二次大戦中の日本軍の占領下における抗日ゲリラの勇猛果敢で持続的な抵抗や、その発展的な農民解放闘争としてのフクバラハップの戦いなどを思い起こせば、個人的な利害得失を越えた大義のもとでの連帯以外にどのような関係が人々を支えたのであろうか（c.f. Kenkvliet 1977）。同様に19世紀末のフィリピン革命に至るまで連綿として続いた民衆反乱において、人々はパシオ

ン（キリスト受難の叙事詩）の意味世界からの類推で、家族の絆や恩義や個人的な利害計算を超えた大義が存在することを理解し、蜂起に参画していったのである（Ileto, 1979）。このような民衆の抵抗や反乱の系譜をたどりながらフィリピンの歴史を振り返るとき、「ヒヤ、ウータン・ナ・ロオブ、パキキサマ」が描く聖なる三角形のなかに閉じこめてフィリピン人の価値と行動様式を語ることは、エンリケスが糾弾するような「植民者の側の審判的かつ印象主義的な視点（:57）」の無意識の露呈に他ならない。

そのような語りは、放談風の解説書の類のなかでは、国家主義や公の概念が希薄なために、身近な人々との関係を重視し、それゆえにネポティズム（身内主義、身びいき）が跋扈するという説明になる（c.f. 中川、菊地）。それが、社会科学としての洗練を加えられると、「パトロンクライアント」関係の重視と、それに基づく「派閥モデル」となる。しかし、そこから導き出されるのは、階級間の本来的な対立が互酬性により緩和されて円滑で調和的なものとなり、それゆえに、現状維持的で安定した社会の像である。

しかし、政治学者のカークフリートはそうした従来のモデルを厳しく批判する。そして中部ルソンの稲作農村サン・リカルド村で、日常生活における階級間の緊張、対立、紛争をテーマとする詳細な調査研究を行い、『フィリピンにおける日常政治』（1990）としてまとめている。日々の暮らしの営みのなかで、政治的な葛藤をめぐって個々具体的な言説や行動がいかんにかにされているかに着目し重視することを通して、カークフリートは、突発的に生起するよう見える農民反乱と、安定的、静態的な日常生活の持続という両極端のあいだの唐突な振幅という二者択一イメージを退け、両者を両極とする連続したスペクトルのなかで日常的な階級闘争が根気よく実践されていることを捉えようとしている。そして村の人々の日常生活を、恩や恥やパキキサマによる順応だけでなく、緊張や対立をも含んだダイナミズムの中で生き生きと描き出すことに成功しているのである。

## 5 おわりに

以上、今日のマスメディアで描かれたフィリピン女性にはじまり、戦中から現在に至るまで日本人研究者が提示してきたフィリピン人像・社会像について概観した。それらが、一定のステレオタイプ・イメージを繰り返しており、そうしたフィリピン理解（誤解）が一貫して続いていることについては、フィリピン側の実態がそのようなものであるのか、それともフィリピンについて語る側の先入観や偏見の基盤が、不変のまま持続しているためなのか。筆者は、後者の理由によるところが大きいと考える。

しかし、「明るく陽気で嘘つきなフィリピン人」という偏見が再生産されてくる過程は、こうした二者択一のいずれかに原因を特定できるほど単純ではない。ひとつ見逃してはならない重要な点は、そうした日本から期待され、押しつけられるイメージに対して、フィリピン人の側が時に反発してそれを裏切る行為をなし、しかし時には積極的にそのイメージを引き受けて演じざるをえないために（それを余儀なくされる状況に置かれているゆえに）、結果として日本の側が抱くイメージ（偏見）を証明し、強化するようなフィリピン人という現実を虚構としてでも構成してしまうことである。<sup>(12)</sup>

1972年の戒厳令体制の成立とともにマルコス政権が観光を重要な外貨獲得手段として以来、日本からフィリピンへの訪問客が急増した。その大部分は男性であり、セックス・ツアーと呼ばれるような団体旅行が少なくなかった。さらに1980年以降は、逆にじゃばゆきさんと呼ばれるようなフィリピン女性の来日が激増した。すなわち、戦後の日本とフィリピンの人的な接触交流の大半は、終戦から20年近くの空白期間を置いた後、1972年以降、一貫して、高度成長を遂げて豊かな日本の男性と貧しいフィリピンの若い女性とが、マニラのあるいは日本のバーやクラブを主たる出会いと交流の場とすることで続いてきた。そうした場でレセプションист（ホステス）やエンターテイナーとして働くフィリピン女性が、客である日本人の求める幻想に合わせて、「明るく陽気に」、けれども時には「嘘もつきながらしたたかに」生きてゆかざるをえないとしても、やむを得ないというよりも至極自然で当然であると言える。実体が偏見かの二者択一のあいだに、政治経済的な力関係のゆえに、強者の偏見に迎合せざるをえないかたちで現実が構成されていると考えることが妥当である。そこで問われるべきは、先入観や偏見に満ちた眼差しがなぜ、いかに生まれ、それを弱者の側にも引き受けさせるような接触交流の場における力関係がいかんにか維持されているかという問題である。<sup>(13)</sup>

さらに重要なことは、こうした草の根レベルでの接触から生まれるフィリピン・イメージと重複しながら、それに認証を与え補強するような作業を、フィリピンを研究したり報道したりする人々が無自覚に行ってしまうことである。その理由は、フィリピン語（あるいは各々の地域におけるその土地の言葉）に習熟しフィリピン語によって調査や研究、取材を行い、自分の目で見、頭で考えるということをしり強く続けず、リンチ以来の「植民地主義社会科学」の英語文献から得られる情報とフィリピン社会の概略図とを鵜呑みにしてきたためであると考えられる。

それでは、そうした批判をふまえて、おまえがそれに代わるどのようなフィリピンを描き出せるのかと反問されると、正直に言って、私自身も困惑を隠すことができない。

先行の諸研究の偏向や限界を指摘することは容易でも、それらの作り上げるフィリピン・イメージを一変させるような、新たなフィリピン像やフィリピン理解を今ここで示すことはきわめて困難である。それは紙幅の制限以上に、現在の私の非力さのゆえであることを率直に認めなければならない。そこで本稿を閉じるにあたって、フィリピンを語るための私自身の今後の戦略、あるいは研究の方向を簡単にまとめておきたい。

基本的には、エンリケスやカークフリートらが提示している新しいフィリピン人・社会像を描く視座を共有し、その方向で研究を進めてゆくことである。しかし、フィリピン人・社会を、安易に「フィリピン人・社会とは」とひとまとめにして語ることはきわめて危険である。国内における地域差・言語グループ差がきわめて大きいため、南部のイスラム教徒や山岳少数民族をも含めて共通のイメージでくくることは不可能である。総人口の90%ほどを占めるいわゆる平地キリスト教民にしても、アゴンシルリヨも指摘するように、「勤勉で、しんぼう強く、ユーモアのセンスがない」イロカノ人、「怠惰に向かう傾向をもち、誇りははげしく、ロマンティスト」のタガログ人、「信心深さと気性の平静な」ビコール人、「楽天的で、快樂主義者」のピサヤ人というようなステレオ・タイプに分けられ、各言語グループの差異が意識され、強調されている(:9-11)。

そもそもフィリピン人という観念が、フィリピンという植民地で生まれた生粋のスペイン人だけを指す言葉から、メスティーソ(混血)さらには原住民をも含んで今日的な意味で用いられるようになったのは、せいぜい前世紀の末頃からである。そういう意味でフィリピン人とは、すでに確固たる内実を伴った実体というよりも、彼らの国民意識の一層の覚醒と強化という、未来への投企によってより明確な像を結びつつある未完の観念と言うことができる(c. f. Iletto, 1993)。しかも文化人類学の研究史を振り返れば、1950年代に隆盛を見た「文化とパーソナリティー論」や「国民性研究」は、印象論的、思弁的で非実証的であると厳しい批判を受け、衰退した。今ふたたび、フィリピン人を全体として描き出そうとすれば、たとえ善意にもとづき、共感的なものであっても、もうひとつのステレオタイプを捏造し、引き続き自分たちとは隔絶した他者として彼(女)らを表象し排除し続ける結果に終わりがかねない。

したがって、具体的な方向は、ひとつにはまず、地域・言語グループごとの文化の相違や、都市と田舎の懸隔、さらには金持や中産階級と貧しい庶民との生活スタイルや意識の差異に留意し、安易に同質均一なひとつのフィリピンということを言わずに、個別、具体的な事例の研究を地道に積み上げてゆくことである。そして第二には、多様性のなかにあるフィリピンのナショナルティー(国民であるこ

と)について彼ら自身がいかに語り、どのような自画像を描きだしているかを検討し、さらには、それを日本でのフィリピン人・社会イメージとつぎ合わせ、両者の乖離と齟齬を検討してゆくことである。彼らの声に耳を傾けて、われわれの理解を練り直し、それを投げ返して再び彼らの疑義や批判をふまえ新しい理解を練り上げてゆくような、対等で不断の往復運動を通してはじめて、ステレオタイプの再生産か新しいステレオタイプの創造(捏造)かという隘路を脱し、理解の実践が可能となるであろう。私自身の課題である。

## 注 釈

- (1) そのほとんど全てが日本男性とフィリピン女性との結婚であり、日本女性とフィリピン男性の結婚はわずかに58例、全体の1%にも満たない。個々のケースが互いに対等で愛情に結び付けられたものであっても、両国の結婚における性比のまったくのアンバランスは、日比間の特異な関係を端的に示している。
- (2) 「フィリピンが危険である」というイメージは、1986年の三井物産マニラ支店長の若王子氏誘拐事件を契機に急速に広まっていった。しかしその事件では、泉水をはじめ日本赤軍が中心的あるいは積極的な役割をになったとされている。それ以後に続いたフィリピンで日本人が殺害された事件も、多くは、保険金詐取を狙い、日本人が計画を立て、フィリピン人を利用したものであった。殺害が起きたときにセンセーショナルに報道されるだけで、その後に事件が解決して首謀者が日本人であったことが明かとなっても大きな記事とならないために、「危険で恐い」というイメージだけが再生産されてゆくのである。
- (3) 意見の対立に決着をつけるために、水島監督は、固定されているアングル・サイズのビデオ・カメラで録画をしながらの公開討論を提案した。それに対して「メディアと人権を考える会」は、「彼のこれまでの反応から考えて、パフォーマンスを狙うあまり映像と表層の論理にとらわれ、問題の本質を深める論議をすることは出来ない」として、その申し出を拒絶し、B5版121頁の資料集を作成した。論争の経過と具体的な問題点の詳細については、メディアと人権を考える会(1993)、水島(1993, 1994)、篠田(1993)等を参照。
- (4) 作品の内部のみに目を向けて作品が置かれているコンテクストを捨象し、作品と外部との関係を無視せよとの主張は、日本人とフィリピン人の双方が投げ込まれ規定されている歴史的・政治的・経済的・その他の諸関係、すなわち作品が意味を持つ場を無視し、さらには視聴者個々人の個別で主体的な読みが導かれる諸コードを無視せよということであり、生成する意味を問うなど言うに等しい。
- (5) 日本軍の残虐行為については、話すことすら拒む両親の不機嫌で固い表情以外には何の言及もない。
- (6) 久田は「売るもの買うもの、抑圧するものされるもの、あるいは同情するものされるもの、といった従来のジャバゆきさんをめぐる歪んだ構図を越える(:291)」ために、フィリピン人たちの多様な実態とニッポンの男との様々な関係について「取材をしつこく繰り返した」のであるが、彼女が否定しようとした「ヤクザにだまされ身も心もぼろぼろにされた可哀相なアジアの女たち」というイメージにかわって、陽気で嘘つきでしたたかなフィリピン女性という別

のイメージを作りあげる結果となった。同書については稿を改めて検討したい。

- (7) フィリピン経済の心臓部であるアヤラ地区や、その周囲を取りまく高級住宅地、その他の場面場面が、実際にモデルにしたであろう場所を彷彿させるほどに丹念に描かれており、著者の綿密な取材を感じさせる。しかし、個々のエピソードは、読者の固定観念におもねるかのようによ俗的である。もっとも娯楽漫画が通俗であって高尚でないこと自体は決して悪いことではないが、それが差別や偏見を助長するものであれば問題である。

たとえば主人公である島がフィリピンに赴任する日、空港に見送りに来た娘が突然に初潮を迎えて困惑しているところを、たまたま通りかかった日本人女性が手当をしてくれ、礼も受け取らずに去ってゆく。親切な日本人の無償の善意に送られて日本を後にした島は、マニラに着いて空港からホテルに向かう車のなかで、手にしていたハンカチを新聞・タバコ売りの少年にひったくられ、同乗の駐在員から「この国は何時でも何処でも油断するなという教訓と思え」と注意される。その夜、ナイトクラブでの歓迎接待を受けてホテルに戻る途中、その少年が盗みを働いて警官に頭を射抜かれて路上に死んでいるのに出くわす。親切な日本人と危険なフィリピンというエピソードの対比の背後に親切・誠実・安全の日本と欲得・不実・危険のフィリピンという構図が見て取れる。

- (8) 浜の本が仮に事実に基づいたものであったとしても、マビニの娼婦を題材とすること自体にセンセーショナルに売らんかなとする思惑を感じず。しかし作者は、ブリジットに対して共感的な理解と対等な関係の努力を続けることを通して、自身の「内なる国際化」が生まれたと述べる。すなわち、じゃばゆきさんを「女性という性と民族とによる二重の差別を受けている」と規定することは、彼女たちを「可哀相」としてしてしか認識できなくしてしまい、それは彼女たちを自分とは無関係として排除したうえで優位者がいなく感情であり、彼女たちの存在に対する侮辱であったという発見あるいは認識の変化を得たという(208-211)。

そして、「あとがき」のなかで、陽気で寂しがり屋のフィリピーナに「日本人男性がしかも真面目な人ほど、コロロといかれてしまうのも無理はない。そして彼らの多くが彼女たちに大金を貢がされていることも(217)」として、交際のフィリピン女性に土地と家の購入資金を調達するために、現職警部補が佐賀県鳥栖市の信用金庫に押し入り、現金280万円を強奪した事件を紹介している。その新聞記事を読んだときに、彼女は思わず「ヤッパ！」と心の中で叫び、「フィリピーナの勝ち！」と評価し、日本人が「コロロと騙されてしまう」理由について「管理教育の中で育ってきた真面目な日本人と、子どものころからいかに人の心を動かせば金がもらえるかを学んできたフィリピン人とは、しよせん年齢が違うのではなからうか(219)」と説明している。

- (9) そのことを最もよく表している秀逸な譬はブラックホールであり、次の描写である。「ブラックホールのような女なのかもしれない。一つしかない戸籍をやっても、ベッドやテレビを買ってやっても、満足した表情を見たことがないのだ。ありったけのものをブラックホールにたたき込み、最後は自分が入っていく。……自分はこの女に家の嫁になってもらいたいと想いながら、本当はこの女にどこか知らないところと連れて行ってもらいたいのかもしよれない(179)。」

- (10) 日本を単系制とすること自体、基本的に誤っている。日本は双系であり、家族形態が「直系家族」と呼ばれる。さら

に菊地が言うように、日本では「家」の存在が信頼を前提とした集団を導くのであれば、「家」制度をもたない双系の欧米社会もまた「不信の社会」ということになる。しかし通常は、欧米が日本を契約意識が希薄で約束を守らないと批判することが多い。

- (11) ベニグノ・アキノの暗殺以降、個人の利害得失、損得勘定からではなく、殉教・殉国という大きな物語の中で一般市民の政治的な覚醒と状況への関与が生まれた過程については、拙著(1991)が中心テーマとして考察しているので参照されたい。

- (12) たとえば沖縄において、外からの労働規律の強制や内からの生活改善運動などを通して、沖縄の人々が「沖縄人」としていかに形成され同時に「日本人」として形成されてゆかについて、富山が詳細な分析をしており、フィリピンの問題を考えるうえで示唆に富む。

- (13) それと同時に、そうした明白な力関係の拘束を受けながらも、その一方で、自己防衛や尊厳の維持、利得の最大化などを意図して、自己イメージを操作しながら日本人客と応対する彼女たちの主体性を無視することはできない。

## 参考文献

- アゴンシルリヨ, テオドロ (岩崎玄訳) 1977 『フィリピン史物語』 勁草書房。
- Ballescás, Ma. Rosario P. 1992, *Filipino Entertainers in Japan*, Quezon City: The Foundation for Nationalist Studies.
- バイロン, グロリア・ジェイン 1993 「愛を表現することの自由」 『国際人流』 4月号。
- Church, Timothy A. 1986, *Filipino Personality: A Review of Research and Writings*, Manila: De La Salle University Press.
- Enriquez, Virgilio G. 1989, *Indigenous Psychology and National Consciousness*, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- 1992, *From Colonial to Liberation Psychology: The Philippine Experience*, Quezon City: University of the Philippines Press.
- 浜なつ子 1988 『マニラ娼婦物語』 三一書房。
- 平塚 武・斑目文夫 1942 『詳解・比島事情』 非凡閣。
- 弘兼憲史 1990-91 『課長 島耕作』 Vol.10~12 講談社。
- Hollnesteiner, Mary R. 1973, "Reciprocity in the Lowland Philippines," In Lynch, Frank and de Guzman II (eds), *Four Readings on Philippine Values*.
- 久田 恵 1989 『フィリピーナを愛した男たち』 文芸春秋社。
- Ileto, Reynaldo, 1979, *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- 1993, "The 'Unfinished Revolution' in Philippine Political Discourse", 『東南アジア研究』 31巻1号。
- 板垣興一・他(編) 1943 『南方年鑑・昭和一八年版』 東邦社。
- Jocano, Landa F. 1966, "Filipino Personality," Jocano Landa (ed), *Filipino Cultural Heritage No.2: Filipino Social Structure and Value Orientation*, Manila: Philippine Women's University.
- Kerkvliet, Benedict T. *The Huk Rebellion: A Study of Peasant Rebol in the Philippines*, Berkeley: University of California Press.

- 1990, *Everyday Politics in the Philippines : Class and Status Relations in a Central Luzon Village*, Berkeley: University of California Press.
- 菊地 靖 1980『フィリピンの社会人類学』敬文堂.
- 1990「双系制社会における組織行動様式：フィリピン教育界の動態的側面」白鳥芳郎教授古希記念論叢刊行会(編)『アジア諸民族の歴史と文化』六興出版.
- 1991「親族関係と名称体系」村武・佐々木(編)『文化人類学』有斐閣.
- Lynch, Frank, 1973, "Social Acceptance Reconsidered," In Lynch, Frank and de Guzman II (eds), *Four Readings on Philippine Values*, (4th edition, 2nd edition, 1964) Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- メディアと人権を考える会 1993『テレビメディアが問われ 私たちが問われている：ドラマ「フィリッピーナを愛した男たち」をめぐって』メディアと人権を考える会.
- 水島 総 1993『「差別反対」『人権擁護』を振りかざすいい加減な市民運動がテレビをダメにする』『宝島30』7月号
- 1994「我が『フィリッピーナ』戦記：抗議グループと対峙した『表現者』の1年」『諸君』2月号.
- 中川 剛 1986『不思議のフィリピン：非近代社会の心理と行動』NHKブックス.
- 中屋健弼 1942『フィリピン』興亜書房.
- 太田好信 1993「オリエンタリズム批判と文化人類学」『民族学研究』18巻3号.
- 奥間徳一 1943『フィリピン讀本』改造社.
- サイド, エドワード(今沢紀子訳)1986『オリエンタリズム』平凡社.
- Sechrest, L., 1969, "Philippine Culture, Stress, and Psychopathology," In Caudill, W. and T. Lin (eds.) *Mental Health Research in Asia and Pacific*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- 清水 展 1990「子供をめぐる家族と社会：フィリピン理解のための試論」『社会科学論集』第30集.
- 1991『文化のなかの政治：フィリピン「二月革命」の物語』弘文堂.
- 1994「ピナトッポ大噴火とアエタ民族の危機：運動の言説をめぐる内省」『九州人類学会報』21号.
- 篠田博之 1993「もつれた糸：『フィリッピーナを愛した男たち』をめぐる論争」『創』10月号.
- 高橋 彰 1972「フィリピンの価値体系」萩原宜之・高橋彰(編)『東南アジアの価値体系4』現代アジア出版会.
- 鷹沢のり子 1987『セシルたちの生き方』朝日新聞社.
- 田中 宏 1995『在日外国人：法の壁、心の壁』岩波新書.
- 榊瀬穰爾 1942『比律賓の民族』東亜研究所.
- 立松和平 1993『雷神鳥サンダーバード』講談社.
- 富山一郎 1990『近代日本社会と「沖繩人」：「日本人」になるということ』日本経済評論社.
- Wolters, Willem, 1984, *Politics, Patronage and Class Conflict in Central Luzon*, Quezon City: New Day Publishers.

## 付 記

本稿は9月29日に比文研の「あの研究会」で「フィリピン・イメージの再生産：『フィリッピーナを愛した男たち』論争をめぐって」と題して報告した草稿を加筆修正したものである。出席の古谷嘉章、杉山あかし、溝口孝司、濱野清志らの諸先生から、また後日には再び古谷嘉章先生から数多くの有意義な批判と助言と示唆をいただいた。それによって内容を改善することができたが、しかし依然として、イメージの再生産のプロセスに関しては十分に解明することができていない。今後の課題である。諸先生に深く感謝します。